Arcueid=Brunestud -- Arcueid=Brunestud -- Arcueid=Brunestud - Arcueid=Brunestud
Adult Only- Adult Only- Adult Only- Adult Only- Adult Only- Adult Only-
ERO Arc
Perceptron - Perceptron - Perceptron - Perceptron

あ…

ああ

あ…あぁ…
…んあっ

やあ…あぁぁ
いやぁぁ
あぁあ…あっ

あんっ！

やあぁぁ！
だめぇぇ

んぁ…
そこは感じすぎて…

んんぅ

我慢出来なくなる
からぁぁ…あっ

ああああっ！

だめええっ
そんな激しく…ああ

あっ！

ああっ

ああっ！
ああ…ついい

はぁ

はぁ

気持ちよすぎて…
頭…とんじゃうぅ

あ…

あ…

ああ！

く…あ…

どぷぉぉ

うっ！

あっ！
ああっ
ぐちゅ
ぐちゅ
やあああぁ
やだ…やだぁぁ
もうだめぇぇ
んああ
ああぁ
ぱっぱっ
イク…
っ…ああ…
イクぅ…
あ…ああっ
ああああ…っ！
びゅくっ
びゅくっ
びゅくっ

にゃ
みゃいん
みゃいん
にゃ
は
は
は
ん～……
そうねぇ
正直なところ
ギッ
今の淫夢は
イマイチだったわ
にゃ
気持ちは
良かったけど
もう少し志貴との
語らいが欲しいわね
それにあれじゃ
私ただのHな女の子
じゃないの
ピンポーン
ピーンポーン
まぁ
今はいいわ

志貴も来たみたいだし

次に期待してるわよ

……

はいは～い♪

ガチャ

志貴ーっ！
いらっしゃ～い

へ……
ひょるるぅ
……
……
かかったな
真祖の姫よ
我が混沌にようこそ
もがが―!!
(嘘だーっ!)
がぽ

んがんぐっ！
（はなせぇっ！）

無駄だ
我が捕縛からは

いかに貴様とて
逃れられ――

くんっ

！

これは
これは…

くくく…何とも
信じられぬが
間違いあるまい

さかっていたか？
真祖の姫よ…

ビクッ

匂うぞ
貴様の股間から発情した
メス豚の臭いが…

なっ…
!?

ガばっ

うにょ
な
うにょ
何を
!!!!

んっ
!?

ガぼっ

んぐっ…
ん！
んむぅっ！
ちゅぽ
ちゅぽ
んふっ！
んお…おっ！
んぶぶぅ！
わざわざこのような
極東の島国まで
足を運んだというのに
この有様
腑抜けが！
貴様を喰らい尽くそうとも
ただほんの一時の喜びすら
見出せぬわ!!!
ずぼっ
んぐぅ…っ！

んっ…!!!
ギッ
んぶぅっ!!!
ぎゅるるるるぅ
我らが同胞を葬り去ってきた
その力を見せてみろ
真祖の姫よ
出し惜しむ必要はない
私も死徒27祖の10位
決して退屈はさせはしない
存分に抗うがいい
それまでは貴様の咥内を
楽しむとしよう
ん…
おぶっ!?
んおおおうっ…!
んんんぅぅぅ!!!
ぶぷっ
ぶぷっ
ぶぷっ
ぶぷっ
んんんぅぅぅ!
ぼた
ぼた
ビク

んおおおっ!!?

ずるうう

くくくく悪くない感触だ

ぶるっ

ぶるぶるっ

んんんっ!!!

どくどくどくっ

ブシャッ

おうっ!!!

ん…ごうっ!!

ブシュッ

んーーっ!!!

ぶしゅっ

んぐうっ!!

ん…んう…っ…

どぴっ

でっおおおお

ぶはぁっ…

かはぁっ

かはっ!!げほっ!

くぅ…

ネネ…っネロオオオオオ!

この変態!!どスケベ!!!

ぶるるるるるる

早く離しなさいっゆ…許さないわよっ!!

力で押し通るのが我ら吸血鬼であろう？

それに変態はどちらだ？こんなにも破廉恥な肉ビラ見たことも無い

どろ…

う…嘘よ…

昼夜問わずに慰めているのか？

やや右のビラが大きいがそれはどうしてだ？

だ、黙れぇぇっ！

よもや言葉で私を止めることが出来るとは思ってはおるまい？真祖の姫よ

!!!……

ん…っ

んあああ…あっ!!!

ずぽ

やぁあ!

あぁ!大きぁあ!

壊れちゃぁあ…っ

痛あああっ!!

はははははは
安心しろ
少し拡げたにすぎぬわ！

自分の秘所を
よく見てみろ

やあっ！

ああっ！

ぐへへへ
他愛ない
あ…
ひぁ
は…はなせぇ
はな…せぇ
ネロ・カオ…ス
ひゃるる
ぶるり
あぁ
!
ダメエええ!
えぇんあああああっ!!

ああ…

ああ～…

んあ！お尻がぁ…っ

ぬちっ

ぬちっ

ぐちゅ

ぐちゅ

ぱぷ

ずちゅ

やめ…てええっ

あっ！

ああ～

こんなの酷い…ひどすぎ…る…

ああぁ！

くはは！真祖の姫ともあろう者が泣き言か

ぐちゅ

うぁ…

ぐちゅ

ぱぷ

ずっ

ずっ

ずっ

ずちゅ

くぅ…

ぅぅぅ…

うぶゅ！

あ…う

だめええ！
耐えられ…なひいっ

あああっ

ずちゅ

ぐちゅ

ぱぱ

ぐちゅっ

ぐちゅ

ぱぱ

ぶるるっ

ひっ！

んんっ…！

ぴくっ

ぴくっ

イクうううう

イクぅ

どくん

どくん

どくん

どくん

いああ…ああああ！

あ…ああ

やぁあああっ!!

あぁあああああっ!!

どぷ

どぷっ

どぷっ

どぷ

んあぁっ

はぁ

はぁ

はぁ

快楽は己が望むからであってこそ

望まぬ快感ほど
不快で苦痛なものも
なかろう

ぬぽっ

どろぉ〜〜

ん…っ

くく
惨めだな

こんな雌が我ら
死徒の畏怖の対象
だったとはな

ゴポッ
ゴポォ…

ゴポポ!!
オオ…

ああ…

あ……っ

今のそのザマは
家畜にも劣るぞ!

だが安心するがいい

あうっ？！

貴様ももう直ぐ
私の一部になるのだ

あ…

あ…あ…ああ

雌ブタは私の中の666の魔物にも
居ない希少種故
丁重に扱うことを約束しよう

ぁぁ

ぁぁ

はぁ

もう…何なのよ…一体

こんな事って…

ずぶ

ずぶ

ずぶ

ああ…あれかな

これは淫夢の続き…？

それなら…

夢か
End・・・

■違和感はない

Arcueid=Brunestud
Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1 Player 1
邪魔よ！ ↱+AorBorC
せーのっ！ ↰+AorBorC
なにやってるの…！ Z+AorBorC
うるさい！ ↓↓+AorBorC
Act Cadenza
黒鍵投げ ↰+AorBorC
メシアン ↱+AorBorC
ブレイドシンカー Z+AorBorC
ガラムマサラー ↓↓+AorBorC
Ciel
Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2 Player 2

月の夜、吊られた白き姫君

CASE of Arcueid

――夜の公園

月がやわらかくその光を地上へと降り注ぎ、そんな月光を浴びて公園全体はまるで整えられた劇場の舞台めいた彩りを得ていた。

どこか非現実的な空気をまとわつかせ、どこか生ぬるい空気が入り混じっている真夏の夜。静寂というには少しばかり質の違う、ねばりっこさが混在する沈黙がその場所を支配していた。

木々は青々とした鮮やかな葉を茂らせ、それらは互いに生を謳歌しながら天を目ざして両手を掲げるように成長している。その雄々しい木から生える枝はガッシリとしており、その気になれば百キロぐらいの重量は支えそうなぐらいに太い。

そんな木々が立ち並ぶ林の中、一人の女性がいた。

誰もがその姿を見たら、自分の目を疑うだろう。それほどまでに異様な、常識では考えられない姿をさらしている。

荒縄によって四肢の自由を完全に奪われた上、頑丈な木の枝に吊るされている。表情は羞恥と怒りが入り混じり、これから起きるであろう事にわずかに怯えているようにも感じ取られた。

それも、全裸というあられもない格好にさせられているからだろう。

陶磁器のように白く滑りそうな美しい乳房、幾度か性体験をこなしたのか少しばかりいびつに歪んでは内側の複雑に絡んだヒダを惜しげもなく見せつける性器。さらには半開きどころか、パックリと開いては腸壁を丸見えにさせている、肛門。

乳首や性器のあたりはうっすらとした桜色を乗せるような、まだロク使い込まれていない綺麗さを周囲にアピールしていた。

さらには全身にベットリと白い精液がからみつき、髪の毛から足の先までその肢体すべてを完全に汚し尽くしている。凌辱の残滓は性器や肛門にも派手に飛び散り、それらすべては渾然一体となって性欲にさらされた事実を主張する。

ただでさえすべて身体中をさらけ出されているという痴態に加え、顔には目隠しがされて視界すらも塞がれてしまっている。

そういったいくつもの要因が重なり合っては、アルクエイドの精神をジリジリと痛めつける。

「うぁ……ぅ、んぐぅ……んぐぐっ、ん……むぅ……ッ、むぐっ……んぐぅぅぅ……ぅぅぅぅッ！」

本来、口からこぼれるはずの悲鳴は淫猥なギャグボールによって完全に封じられ、そのわずかな隙間からよだ

れがこぼれる。指先ぐらいしか自由を許されないという状況の最中で、周囲の張りつめた空気は徐々にその鋭さを増していく。

「すげ……っ、なんだよこれ……」

「んぐうっ!?」

誰かしらが漏らしたその声から、周囲から投げつけられる鋭い空気が複数の視線である事をアルクェイドに理解させる。ただでさえあられもない姿をしているという事に、羞恥心は十二分に刺激されていた。にもかかわらず、さらにはそれが多数の人間に見られているという事実。

それは恥ずかしさを倍どころか、数倍、数十倍にまで跳ね上げる。

(こんなの……っ、てぇ……、ない……ッ)

一糸まとわぬ姿を、普段ならば布地に覆われている大事な箇所を、見知らぬ連中に対しておしげもなく見せつけている。ほとんど声を出す人がいない状況で、獣めいた男達の吐息ばかりが周囲に充満する。

誘蛾灯のように、精液の臭気と異様な格好というのが情欲をたずさえた男達を周囲から呼び寄せる。そうやって集まってくる人間達の格好はてんでばらばらではあったが、表情はどこか似通っているようでもあった。

「んむぐぅ……ッ、んぐぐぅぅぅ……ッ、んぐっ、んぐぐぅぅぅ……ッ!」

実は……膣肉の奥の奥、普通に肉眼で見るには少しばかり奥まりすぎていて確認する事の出来ない場所で、蟲が一匹蠢いていた。

それはアルクェイドの愛液をすすっては徐々に成長するという、酔狂な人間によって作り出された特殊な蟲であった。

自分が栄養を得る為に膣穴に入り込んでは、アルクェイドに性的な刺激を与えて派手に悶えさせるという動きを見せる。拷問用に作られたのか、貴族が遊ぶ為に作られたのかは、はっきりとしない。

だが今この場においては、単純に性的な遊具として使われていた。

「うぉぉ……おぁぁぁ……ぁ……おおおおおおおおおおうぅぅ……」

汗が後から後から新しく溢れ出しては、乱れた髪を頬や額、首筋へと貼り付けて淫靡さをより強調していく。

口元からこぼれる言葉はギャグボールによって容赦なくシャットアウトされ、本来のアルクェイドが持ち合わせている可愛らしい印象の表情を曇らせる。延々と続く責め苦を前に気力はカンナで削られるようにすり減り、無気力さすら漂っているようだった。

めくれあがった皮肉が、ぶるぶると震えては何か言葉を放とうとするように震え、愛液と精液のいりまじったよだれを新しくこぼす。その膣奥ではまた蟲が少し愛液をすすり、その体躯を小刻みに震わせていた。

「うぁぉ……ッ、がごごぉぉぉ……う」

助けもあえぎも懇願も怒りも表す事の出来ない状況が続く中で、わずかでも動く首をグッと左右に振っていく。
(も……これ以上、な、んて……こんな……のぉぉぉ……ッ、こわれ……ちゃ……ぅ……)
二つの穴から断続的に続き、全身に反響して響き渡る凌辱のエコーはアルクェイドの意思に反して甘い刺激をさらに加えてくる。
性器も、肛門も、これ以上刺激を与えられたら壊れると。もうこれ以上絶頂感を味合わせられたら、理性が崩壊しそうだと。
辞めて欲しいと必死に訴えかけるように、ただ芋虫みたいに四肢を縄に縛られた状態で首を振り続ける。
しかしながら、この場にいる人間はそんな必死のアピールすらも、単純にアルクェイドが性欲でもだえているだけとしか理解出来なかった。
「おい、まだガンガンに感じまくってるぜあいつ……マジ変態だな……」
容赦なく叩きつけられ続ける、ささやきによる刺激。スパンキングみたいに直接的な痛みではなくても、そのささやきは鞭よりも激しく心を打つ。ビクッと身体はそんな酷い言葉を前に震え、女芯がさらに震える。
この状況をひっくり返すような物事が起きる希望も持てず、蟲はアルクェイドの意思を完全に無視した所で暴れ続ける。膣の内側、膣壁に張り付くように細い触手を網のように張り巡らせ、愛液をすすり出す。

それによって震えヒクつく性器の淫らな姿を、周囲へと見せつける。周囲はますます熱気に満ち、その視線は股間に注がれるのが気配からも痛くアルクェイドに伝わっていく。
「んむぐッ、んんう……ッ、うぐ……ッ。ぐぐぅ……んむっ、んぐむぅ……んっ……うう……おうう……おうぉぉぉ……う」
膣の奥の奥、股間の割れ目というアルクェイドの中心部から、四肢の末端に向けて血流に乗り運ばれる凶暴な快楽。普通の人間ならばとっくの昔にその精神を食いつかれ、陥落しては情欲にあえぐだけの獣と化している。
だがそれを必死にこらえてはいたが、表情は刻一刻と変化していく。歯を食いしばってこらえようとしていた頬は紅潮し、ゆるんでいる。他の人間達の前でこれでもかと見せつけられている膣口も、肛門も、熟れた果実のように充血していた。
(も……う、こんな……だ……め……たえられ……たえる……って、なにぉ……たえるんだ……っけぇ……)
縛られたままの身体が揺れ、腰が上下に振り立てられる。内股を派手に汚し続けていた愛液がピピッと周囲に振りまかれ、淫靡すぎる臭気は汚らしさといやらしさをこれでもかと伝える。
やや水分が飛んでいる白濁液は粘度を高め、ヌタリ……ヌチャリと音を立てる。
「む……おぶぅ……ッ!」

口の中で適度に溜まり続けていた唾液が小さく音を立て、ギャグボールの隙間から妙な音をかき鳴らして吐き出される。くぐもった悲鳴の最中、唾液は穴から飛び散った。

どれだけ自己で否定しようとしても、生理的に沸き上がってくる泉めいた衝動を抑える事はかなわず。痛みよりも苦しみよりも、快楽の波に心は侵食される。

膣奥で愛液をすすり続けていた蟲がキチキチと小さな牙をかき鳴らし、与え続けていた刺激の波をさらに一段階上へと押し上げる。

(なっ、そ……んなっ、だ、め……つよすぎ……ッ、こんないき……なり……っ、なんてぇ……っ、やっ、ぅあぁぁ……ぅ)

もはや思考すらもノイズが大きくかかったように、あえぎ声に支配される。理性以外の身体のすべての箇所が、快楽に支配されてしまえと、快楽を受け入れろと降伏勧告を出す。

小さく鳴咽混じりの吐息が漏れ、左右に振っていた首がビクッと上下に振れる。

自身に襲いかかる津波を脳裏で理解したかのように、暗闇から迫る恐怖の波は羞恥心も理性も何もかもを一瞬で包み込む。

「おぶっ、ぶ……ぶぶぐむぅ……ぅぅッ、んむぅ……んっ、んんっ、んむ……ッ、んぐぐぅ……んっ、んんぅぅぅぅぅぅ……ッ!!」

何かが一つの終わりに向けてたたみかけるかのように、堤防は決壊して性欲にまみれた情欲の濁流が一気に走り抜ける。

完全に動きが阻害されるように縛られている四肢はその場で大きく跳ね、稼働するギリギリ一杯の部分で絶頂している事を示す。目隠しのせいで完全に閉じた視界の中、快楽はより強調される。

全身を小刻みに揺らしてはげしく跳ね回るその姿は、快楽の海に溺れた惨めなメスでしかなかった。

(あはぁ……っ、わぁ……わ、たし……てばぁッ……こ われちゃ……った……のか……な)

意識の波が断ち切れてしまう寸前に、心の中でそうつぶやく。

そんな声にもならない言葉はその場で溢れ出す愛液に、容易に流されては雫と一緒に溶けていく。

だが、そこで意識が完全に途絶えるから思われた瞬間。膣奥、下腹部の中心にいた蟲が急激に律動を始める。

「お、ごぉッ!?」

今まで存分に膣内を蹂躙しては愛液を吸い出し、それを栄養分として溜め込んでいた状態が、一気に変化する。細かく蟲の肢体が暴れるように動き、全裸の状態で下腹部が少し盛り上がるように蠢いていく。

やがてその状況は、オセロをひっくり返すような劇的な変化へとつながっていく。

「な、なんだ……あれ。急に腹が……膨らんで……?」

Arcueid Brunestud

ギャラリーの人間達がそうつぶやき、それでも固唾を呑んで見守る中。風船を膨らませるように、腹部はググッと歪な状態からプックリと膨れあがっていく。やがてそれは妊婦を想像させる『腹ボテ』状態へとすぐに変貌していった。

「お、お、お、お、おぉぉぉぉぉ……ぉぉぉッ！！」

低い、完全な重低音の悲鳴が口元からは迸り、悶絶とも言える質の違った悲鳴がうなりをあげる。

（な……に、これぇ……おなか……わたしのおなか、がぁ……？）

張り裂けんばかりに内側から急激な拡張を受け、同時にそれは内臓といったいくつもの器官をグッと強引に押しのけていく。

ほぼ瞬間的とも言っていい急激な状況の変化は、それをない方させている身体にも大きくダメージを与える。

……はずだった。

本来ならば内側から壊れ裂けてしまうぐらいの変化は、何故だか大きな快楽の波を生み出してはさらに身体を覆い尽くす。

「うごぉ……ッ、オゴォォォォッ？　おごっ、お、お、おおおおぉ！！」

目隠しの下で半分ぐらい白目をひん剥きながら、鯉が滝を昇るような激しい勢いでもってアルクェイドは立て続けに与えられる刺激に絶頂を叩き込まれる。

腹部を異様に膨れあがらせながら、ビクビクと全身をさらに緊張させ、四肢をつっぱらかせて拘束されたまま悶える。

（や……っ、これなに……これ、な……んなのよぉっ……さっきから、ずっと……や……なのに、いやなのに……い……）

気持ち悪い。

なのに、気持ち良すぎる。

完全に矛盾している頭と身体の乖離した反応に、心は戸惑いをさらに大きくして脳髄の揺れ幅は限界を超えた領域まで突入していく。

「ぶぶぶぅぅぅッ！」

ひときわ大きく身体がしなりをあげたかと思うと、膨れあがっていた下腹部の奥で蠢いていた蟲の一部が弾ける。膣中でうねりながら触手は一気に膣壁に沿って駆け巡り、その歪んだ膣口から液体がプシュリと吹き出す。

膣口から触手を産み出すような格好になったかと思うと、その触手はズルズルと派手に伸び出していく。

伸びた触手はその先端を、すぐ近くにあるもう一つの穴へと狙いを定め、まるでそこに収まるのが当然とばかりに入り込んでいく。

「ぶ……ぅぅぅぅぅッ、ん……むぐっ、むぐぅぅぅっ……んむっ？　んぐぅぅっ、ふぐぅぅぅぅっ」

すでに幾度も肉棒を挿入されて淫らに拡張されていた肛門は、そんな触手をやすやすと受け止めて自在に入り込ませていく。ソワリと背筋を駆け抜けるうすら寒い違

和感と、全身に電極を付けられて微弱な電流が流される感覚。

（あぅあぅッ、ぉ……なかの中を……かきまわさ、れてッ、前の穴と後ろの穴がつながったみた……いにぃ……）

前後不覚になり、見えない視界にもかかわらず、目の奥が点灯を繰り返すという状況に追い込まれる。

「な、なんだ……これ……」

周囲にいたはずの男達は、そうやっていきなり触手を産み出して、さらにその触手が尻穴まで犯していくという常識を完全に逸した光景にただ度肝を抜かれる。

そんな視線が集中している先で、アルクェイドは鼻から口元から、膣口から肛門から、ダラダラと種々さまざまな液体を垂れ流していく。

ビクビクと、激しい痙攣をさせ、液体をまき散らしては悶絶した声を垂れ流していく姿。それは今までの好色に満ちた視線から、戦慄の視線へと色を変えていった。

「むぐ……ぅっ、むぼぉぉぉぉぁぁぁっ！　……んぁっ、ぶぁっ、むぐぅぁ……ぁぁっ、ぐぁっ、あ……ああぁぁぁぁぁぁっ、ぁぁぁっ！」

蟲の刺激によってただ嬲られている状態でも、その性感はすさまじいモノを与えていくのに。それが前後の穴を同時にほじくりまわす事によって、性感は二倍どころか数倍にもなってアルクェイドの肢体を引っかき回す。

暴力的に犯されちぎれそうに縄が肢体に食い込むのに、身体は痛みを超えたさらなる快楽を求めるようによじられていく。それはギリリと脳裏に牙を立てられたかのような不可思議な恍惚感というのをアルクェイドに与えていた。

（なにこ……れ……え、しんじゃ……わたし……い、きもちが……よすぎてしんじゃ……ぅ……いしきが……のみこまれぇ……ぅぁ……）

鼻からも口からも吹き出すさまざまな液体によって呼吸が阻害され、脳に回る酸素が欠乏する事によって、意識はさらに押しつけられる。それが身体全体を襲い来る快楽の波をより強め、思考力を奪っていくという状況になっていく。

だがそういった部分にアルクェイドは気が付かないまま、排泄器官を逆流して身体の奥へと入り込んでくる触手のなすがままにされる。

腹部を通して脳髄へと直接流し込まれる刺激、快楽の波は振動幅の領域をさらに拡大して細胞の一つ一つにまで染み込む。

（も……だめか……も……志貴……い）

うっすらと霞がかった意識の中、まるでその季節を切り取ったかのように鮮明な姿をした笑顔が思い出される。

だがそれも、走馬燈にすらならないわずか一瞬の事でしかなかった。

「ぶふ……おぉぉぉ……ぅ」

ブシッ、と汚らしい音が弾けると同時に、蟲はその身体を脈打たせる。同時に身体の内側を一気に満たす白濁

液が分泌されて、膣穴と直腸を一秒とかからずに精液で満タンにしていく。呼吸に合わせて自然と伸縮する身体の動きは、許容量を超えた精液をボタボタと吐き出しては、腐臭すら混じっている精液をまき散らす。

「んぶぶぶぅぅぅ……おおおおお……」

ビクンッ

ビクビクンッ

熱い、熱い液体は強力な酸でもって脳を焼き、溶かしつくしていく。激しくのたくりながら触手はその動きを少し早め、白い液体はさらに奥からと精液を吐き出す。疾走する精液は膣壁を幾度となくノックし、壁を丹念にこすり上げて四肢を性欲という毒で蝕んでいく。

精液が充満した子宮と直腸により、膨らみを帯びた腹部はさらに一回り大きくなっているようだった。

(や……らぁぁぁ……)

否定、ただ否定する言葉しか浮かんでこない。身体の自由が無くなっている状態の中で唯一できる事は心による否定であり、そのささやかな抵抗のみがよりどころになる。

溶けて、消えゆきそうな意識。他人の助けを求めようとすがりつき、ただ必死になって自我をつなぎ止めようと混濁に抵抗する意思。

限界の限界に至って快楽を前に四肢を激しく痙攣させてもも、まだそれはアルクェイドが持ち合わせているプラチナのように犯されない精神だった。

「むぅ……んぶぅ……ッ、あうっ!?」

膣口と肛門から存分に白濁液をひり出し続けるオブジェとなりかけていた所で、細い触手が一本ばかり口元の方へと伸びていく。それはアルクェイドの口を塞いでいたボールギャグを不意に外し、口の自由を与えるという不思議な動きをした。

「あうぁぁぁ……っ、あひっ、うぁぁぁ……ッ、ふぐうあひぁぁぁぁぁぁぁぁぅッ!」

口元の枷が外れても、その端正な口は歪んだままで激しい嗚咽を吐き出す。連続的に襲ってくる快楽の波はあえぎ声しか呼び起こさず、緩んだ口元から漏れる悲鳴は熱を帯びている。

「あっ、ひぃぁ……ぅ、あうぇおおおぅぅ……ッ、も、おぅ……やぁ……ぅ……ぁぁぁ……ら……ぁぁ、うぁぅぅぅ……らめぇぇぇ……」

触手の動きは今もなお激しく、吹き出す精液の勢いは不思議と収まらない。すでに数分以上も続く射精を受け続け、全身をさらにビクビクと痙攣させる。

絶頂から絶頂へ、おまけにさらなる絶頂へと、連続的に叩きつけられる快楽を前に理性だけが砕け散る。

駄目という否定の言葉はろれつが回らなくなって、よだれまみれの口元から無情に溢れる単語。

「らめっ、らめぇぇぇっ……もぉ……おおおおおぅぅ……ぅおおおおおおお……ッ……めぇ……」

ビュッ……

ビュクビュク……ッ

「おぁ――――――ッ、ぁ――――――――っ！」

子宮に完全に根を下ろしては巣を作るように膨らみ、さらには触手を伸ばし肛門すらも同時にえぐって蹂躙し続ける蟲。

そういった蟲の容赦も遠慮も無い愛撫混じりの射精を受け、ついには口から漏れ出す言葉が純粋な悲鳴へと変貌していく。意味のない単語を漏らしてしまう状況へと至り、もはやアルクェイドの思考は完全に快楽という状態に溶かし込まれていた。

（らぁっ、らめぇぇっ、も……し……きぃ……しきぃ……っ……あひぃぃ……）

その状況の中、周囲から感じる視線といったモノもすべて頭の中から消し飛ばされていく。理性という枷が強制的に外され、身体の中で抑圧されていた排泄的な欲求が唐突に首をもたげだしていく。

ひたすらにそうして心の中で唱えられ続ける名前は、もはやその相手が誰であったのか。それすらもアルクェイドは思い出せないぐらいに、快感の波の中でただ自我を溺れさせるしか出来ず。

完全に開かれきった肢体は無意識に押し込められていた尿意を剥き出しにした。

ジョッ……

ジョボボボ……

「あぁぁぁぁ……ぁぁぁ……ら……ぁ……ぁぁ……らめらっへ……ばぁ……ぅ……」

尿道が解放され、アルクェイドは縄にしばりつけられた状態のままで失禁しはじめる。吹き出してくる白濁液の澱に黄金色の尿が混じり、とめどなく溢れ出す液体は白濁の滝をさらに輝かせる。

周囲にいた男達は、いつしか完全に無言になってはその淫靡な行為に見入っていた。透けるような白い肌と輝くような金髪をした美しい女性とも言える、アルクェイドの痴態。

人目を気にして必死に耐えていたのに、それが快楽を前にしてただ淫靡に腰を振っては絶頂して失禁するという見せ物。それは誰をも魅了する魔眼めいた光景にすら感じられる、エロスに満ち溢れていた。

「あぁぁぁぁ……おぉぉぉぁぁぁぁ

奥付け

■発行人：浅賀葵

■連絡先：aoi@asaga.sakura.ne.jp

http://home.att.ne.jp/red/nori/

-ERO Arc-

Adult only